「この国ではみんな道になります～身をもって学ぶ」

●マネル→マネブ→マナブ

265年続いた江戸時代、日本で、なにかを教える、学ぶというときに、「知行一致」、「知行合一」ということが大切にされました。それぞれの分野で先人が積み重ねた知識を頭で学ぶのは当たり前ですが、それと共に、必ず、自分の身体をもって学ぶことが重んじられていました。

これを「知」と「行」といいます。言いかえれば、知識と体験、頭脳と身体、客観性と主体性という二つが両立し、初めて、教育、学習、習得が成り立つと受けとめてきたのです。

身体を通して、先輩、先人をマネルことをもとした行いを、マナブといいました。〈マネル→マネブ→マナブ〉です。マナブという頭の行いは、かならず、マネルという身体の行いと共に成り立つということです。

●この国ではみんな道になる

寺子屋の学びを考えましょう。ご住職がたがお寺の本堂で、子どもの教育を行いました。江戸末期の寺は約7万で今と余り変わりません。小学校は今、2万校弱です。すべての寺で寺子屋を開いていた訳ではありませんが、決して、少ない数ではありません。

「読み、書き、算盤」という言葉は、頭で行う知的な学習です。しかし、住職が、本堂で、それだけを教えたとは考えられません。必ず、身体を通した心の教育、人格教育がなされました。

地獄極楽のお話で倫理観を、因果の道理で人の世のあり方を、挨拶、履き物を揃えるなど、お互いを認め合う生き方です。知識だけでなく子どもの心やその魂を育て、人格成長の教育がされたのが、寺子屋という学び方です。

一方、職業や技術の習得は、徒弟制度と呼ばれ、これも、単なる知的･技術的な習得に終わらず、主人の家に住み込み、日々の生活、行儀･見習いなど人格を通して身につけていきました。

知識や技術を学ぶ以前に、かならず人格的な修練を積み、成熟することが要求されたのです。技術だけあっても一人前とは呼ばれませんでした。知識･技術と人格が一致し、合一することで、はじめて学習や習得が成立したのです。今でも、職人気質、その道の名人、達人というとき、知識や技術だけでなく人格を伴う姿をいいます。

また趣味や芸術の分野でも、その習得の方法を「道」と呼びました。これも知識の習得に終わらず、人格成長を重ねて捉えています。CMで、茶道、華道、弓道、この国では皆、道になりますと言っているのはこういうことです。全人格的な学びが本来の学びでした。

●雪が溶けたら何になるか

明治維新の開国以降、今日に至る教育や学習は、近世の学び方とは随分変わりました。

それは、富国強兵政策を導入する時、一緒に欧州の近代的教育体系を取り入れた結果だといわれます。つまり、教育についての考え方の根本を今までとは別のモノに変えたのです。

そこでは、知的学習と人格教育は分断されました。もちろん、寄宿舎制度を残した私立学校や仏教教団の仏教学院などには、今でも両者の合一を目指す学び舎は残っていますがごくわすかです。

今日、ほとんどの学校では、知的学習、知識そのものが細かく専門に分けられています。こまかく部分に分けて勉強すれば、それをもとに、全体を理解することができるという考えです。しかし、このような教育現場では、全人格的な意味での学習は殆どなされなくなりました。

雪国の小学校の授業で、「雪が溶けたら何になる?」という問いに、「春になる」と答えた生徒に、バツがつけられたという味気ない話があります。春を待ちわびたその子の心の繊細さ、情緒の豊かさに、教育現場が対応できない、教育者が心を寄せられなくなったというべきでしょうか。

教えには、実感が伴って、人間が育てられます。親鸞聖人は、「念仏成仏これ真宗」といわれ、お念仏して救われることをお勧めです。さて、私は、理屈だけで、お念仏を称えることをおろそかにしていないか、また、称えることを勧めずに終わっていないかと思いを巡らせました。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。